

# 英語の綴り字改革に関する展望

—— Sweet / Murray / Crystal による言語学的視点 ——

大 森 裕 實

## Perspectives on English Spelling Reform from the Philological Viewpoints of Sweet, Murray, and Crystal

Yujitsu OHMORI

The aim of the present paper is to explain the complicated matter of English spellings and pronunciations in terms of spelling reform, especially from the philological points of view of three distinguished scholars: Henry Sweet, James Murray, and David Crystal. These scholars are representative intellectuals in 19th, 20th, and 21st century language studies respectively, and by examining their work we can see the issue of spelling reform in historical perspective. Sweet's viewpoint is related to the transcription of sounds of words in phonetics, while Murray's is connected with the representation of sounds of words in monolingual general dictionaries, which are often regarded to be highly influential as the norm among the populace. Finally, Crystal's sociolinguistic suggestion is based on an extremely realistic viewpoint in the 21st century, where English has attained the status of a global language or an international language. This standing means that in today's world, reformation of English spellings is an issue to be dealt with not only by the British and Americans, but by the worldwide multitude of English users who share the right to seek the improvement of cumbersome spellings and pronunciations in EGL/EIL.

## I. 序——英語における綴りと発音のカオス——

紀元後21世紀に突入して最初の10年が経過しようとする現在、英語という言語が実質的に「世界語 (EGL) / 国際語 (EIL)」としての地位を占めたことについて、この現象を英語帝国主義の発露として批判する立場の者は別にして、多くの者はその現実を直視することから逃れることはできない。そのことは同時に、英語とは語族を異にする言語を第一言語(母語)とする学習者にとって、換言すれば、言語間の距離の遠い第二言語習得を行なう者、例えば日本人学習者にとっては多大の労苦を伴う不幸な現象を惹起したと指摘することもできる。その労苦の大きな要因の一つに“綴り字と発音の乖離”という現象があることは衆目の一致するところであろう。もっとも、日本語であっても、漢字を取り入れた時期により、同じ漢字「行」についても漢音では「コウ(銀行)」と読み、呉音では「ギョウ(修行)」、さらに唐音では「アン(行脚)」と読み分けるのであるから、それほど驚くには当たらないと思われなくもないが、英語の場合には表音文字であるローマン・アルファベットを採用しているという点で根本的に事情が異なる。そもそも [u] の音価を表わすアルファベット u が、put/but/business/bury においてそれぞれ [u]/[ʌ]/[i]/[e] (正確には ε) を表わし、結果、5基本母音のうちの4つの異なる音価 (a, i, u, e) を包含してしまうことになり不都合が生じる。これとは逆に、最も典型的な事例として英語史書に記載されるのは、同じ [i:] の音価を表わす11通りもの異なる綴り字の存在である——deep/be/sea/Caesar/people/amoeba/receive/believe/machine/key/quay—— [児馬1996: 96]。実際のところ、British English における容認発音を意味する Received Pronunciation という英単語を正確に綴ることのできない大学生の少なくないことも経験的事実である。また、同問題に関して、英語史書の Coffee Break として必ずといってよいほどに記載される逸話は、ノーベル文学賞作家 George Bernard Shaw が揶揄した「英語の fish という単語は ghoti と綴ることができる」という指摘である。[f] という音価が enough や laugh の語尾に存在し、[i] という音価が women の強勢母音に、そして [ʃ] という音価が na<sup>ti</sup>on や sta<sup>ti</sup>on に存在することは事実ではあるが、実際にはその音価が実現される環境にはない——例えば、語頭 gh は ghost のように [g] を表わす——。いずれにしても、劇作家 G. B. Shaw は一般の私達が想像するより

もずっと真剣に英語の綴り字問題とその改革に思いを巡らした20世紀同時代知識人であることは疑う余地がない。

そもそも、なぜ英語がEGL/EILとして選択されたのかという疑問に対して、英語という言語それ自体にEGL/EILとなる本質的（内在的）優位性のないことは留意すべき事項である。発音・文法・綴りが他の諸言語に比べて習得容易であるとはいえない。しかし、政治・経済・報道・広告・放送・映画・音楽・旅行と安全・教育・意思疎通というさまざまな側面からの必然性がある、つまり、外在的優位性があるという表現に集約される[Crystal 2004: 10-11]。その環境要因の主たる影響力がかつては大英帝国にあり、現在はアメリカ合衆国にある。もっとも、過去からの負の遺産が上掲の“綴り字と発音の乖離”であるとしても、正の遺産もあることは指摘しておかねばならない。英語史上二度の大きな言語的変革を遂げた英語にとって——すなわち、①Anglo-Saxonの言語である古英語(OE)から、それとは異なる文法をもつ中英語(ME)への移行と、②中英語(ME)から、英国ルネッサンスの申し子Shakespeareと英国宗教改革の一大成果ともいべき欽定英訳聖書(Authorized Version)に代表される近代英語(Mod. E)への移行を経たのだが——“語彙の多様性”は表現力を豊かにする効果をもたらした。例えば、Sir Walter Scott, *Ivanhoe* (1819)に描かれた二言語併用状態——生きている時と食卓に上った時に使用される異なる語彙：ox/beef; sheep/mutton; calf/veal; swine/pork; deer/venison——は、Anglo-Saxon由来（前者）とNorman French由来（後者）の共存による語彙拡張を示す典型的な事象である。また、同じ内容を表わす異なる語彙レベルも特徴的である——rise (English)/ mound (French)/ ascend (Latin) ; ask (E)/ question (F)/ investigate (L) ; kingly (E)/ royal (F)/ sovereign (L)——。

そこで本稿では、過去からの負の遺産ともいべき英語の“綴り字と発音の乖離”問題について、その解決方法として位置づけられる「綴り字改革」(Spelling Reform)に対し、音声学という言語研究の視点から、辞書編纂学の視点から、国際英語観という社会言語学の視点から明示的な姿勢を示す3名の言語学者(H. Sweet, J. Murray, D. Crystal)の見解を中心に議論を進めることにする。それは同時に、それぞれ19世紀、20世紀、21世紀(現時点)を代表する言語学的見解を通観するという手法でもあり、その過程を通して、当該問題の実態を把握し、その将来を予測することが

できれば、本稿の目的は達せられることになる。

## II. 現在に至る綴り字の固定化と綴り字改良の潮流——予備的管見

英語の綴り字問題については、渡部昇一「綴り字改革」(『小論集成(上)』2001: 93-98)に簡にして要を得た記述があり、これは石橋幸太郎(編)『現代英語学辞典』(成美堂, 1973)の“spelling reform”の項に載録されたものからの再録である。さらに、当該問題の詳細は同氏の著わした『英語学史』(1975)から多くの知識を得ることができる。

主として英語史の講義で言及される紀元後13世紀の宗教詩 *Ormulum* は、スカンジナビア系の *Orm* という人物が北部地方に接した *East Midland* の方言で書いた文献であることに学術的意義が見出されるのではなく、氏の考案した綴り字法に意味がある。それは、いわゆる短母音に後続する子音を二重表記したもので、渡部氏はその二重子音の直前の母音が短母音であることを示す標識——例えば、*Crisstenndom* (= *Christianity*), *þatt* (= *that*)——であると指摘する一方、市河三喜(編)『英語学辞典』(研究社, 1940)はその二重子音が長子音であることを示す標識——例えば、*unnderrstanndenn* (= *understand*)——であると指摘しており、その解釈に違いはあるものの、*Orm* の綴り字法に一定の評価を与えている。また、短母音を示す符号 *breve* の使用 (*i* や *e* など) も特徴的である。つまり、*Orm* は英語史上最初の正音学者 (*orthoepist*) であったといえるが、それは例外的事例で、綴り字改革運動は近代英語 (*Mod. E*) の時代に入って本格化した。

ところで、英語史を通観すると、標準書き言葉英語の成立過程にあつては、*East Midland* 方言 (特にロンドン地域の話し言葉) がいわゆる「標準語」の雛形として定着する要因の一つとして、1476年にウェストミンスター寺院の中庭に英国初の印刷所を開設した *William Caxton* (?1422-1491) による活版印刷術の導入と、氏が印刷物に採用した綴り字に依拠するところが大きいことは人口に膾炙した見解であろう [Crystal 1988: 188]。Caxton は大陸で活版印刷術を修得し、英国に帰国後、*Chaucer* の *The Canterbury Tales* (1478) や *Troilus and Criseyde*、*Malory* の *Le Morte Darthur* (1484) など100点近くを出版し、それが英語の綴り字の固定化に貢献したとするのが一般的な見解ではあるが、当時の同一印刷物

刊行部数の限界を500-1000部だと推定すると、その影響力は神話的に語られるほど絶大なものではないかもしれない。Caxtonが前時代（中世）に傾倒していたため、「ルネッサンス期における印刷術の影響は英国内の出版物よりも、やがて洪水のように輸入されることになる大陸の出版物による影響のほうが大きかったこと」も看過できない事実である〔久保内1993: 190〕。いずれにしても、その後を生じる“大母音推移”（Great Vowel Shift）がなければ、母音と綴り字との乖離はこれほど進むことはなかったであろう。

それからおよそ100年が経過して、エリザベス朝からスチュアート朝を迎えると、新大陸アメリカの植民化が進み、1607年のヴァージニア州チェサピーク湾とジェームズタウンへの入植と、1620年のマサチューセッツ州ケープコッドへの入植は成功したといえるが、その折、新大陸に移住する人々と供にもたらされた英語は17世紀の発音と綴り字であった。現在のアメリカ南部方言は入植者の出身地 Devon や Cornwall の方言特徴を継承して、母音の後の [r] をしっかり発音するが、他方、アメリカ北東部方言は入植者の出身地 East-Anglia の方言特徴を反映して、母音の後の [r] を発音しない。次に引用する *Mayflower Compact* (1620) は入植当時の英語を知るうえで有益な情報を提供してくれる。

We whofe names are underwritten, the loyal subjects of our dread  
fovereign Lord, King James, by ye grace of God, of Great Britaine,  
France and Ireland, King, defender of ye faith, etc., having  
undertaken for ye glory of God and advancement of ye Christian  
faith, and honour of our King and countrie, a voyage to plant ye  
firft Colonie in ye Northerne parts of Virginia, doe by these  
presents solemnly, and mutually ... covenant and combine ourfelves  
together into a civil body politick for our better ordering and  
preservation and furtherance of ye end aforefaid ...

[Bryson 1996: 13]

この事例から、当時の書き言葉が現在の英語とそれほど大きく異なっていないことが分かる。例えば、① j(S) と s の混用、② the と ye の混用（この場合の ye は二人称複数形の主格とは異なり、印刷スペースの確保のため

め)、③綴り字の違い (*Britaine / Northerne / togeather* 等) を指摘することはできるが、総じて、書き言葉に大きな隔たりは看取されない。しかし、綴り字と発音が当時カオス状態であったことは、Bryson (1996: 14-17) を参照すると、次のようにまとめることができる。

1. **kn-** : Middle English で必ず発音されていたが、この時期は過渡期にあたり、一般に *tn* と発音されていた。  
*eg. knee* は [kuh-nee] > [t'nee]
2. **gh** : *night* / *light* の *gh* は一世代ぐらい前から無音になっていたが、語尾周辺の *gh* は発音される場合もあれば、発音されない場合もあり、[f] の音になる場合もあった。*eg. laugh/nought/enough/plough*
3. **[ɑ:]** : 現代の *father* / *calm* のように後舌開母音がなく、*father* は *gather* と、*calm* は *ram* と韻を踏むことができた。
4. **was** : 現代の [wəz] ではなく [was]。一部ではかなり後代まで保持された。Byron は *pass* と韻を踏ませている。また、*kiss* は *is* と韻を踏む。
5. **war** : 現代の [wɔ:] ではなく [wɑ:]。従って、*car* / *care* と韻を踏む。現在の発音は19世紀以降のこと (Mencken, H. L., *The American Language*, p. 434)。
6. **home** : *whome* と綴られ *wh* 音を保持していた。
7. **o / u** : *cut* と *put*、*plough* と *screw*、*book* と *moon*、*blood* と *load* で韻を踏む。17世紀後半になっても John Dryden は *flood* / *mood* / *good* の区別をしない。現代英語でも *oo* 綴りの発音は複雑である。
8. **oi** : [ai] と発音された。*coin'd* は *kind* と同じように、*voice* は *vice* と同じように発音された。独立戦争の頃までは、[oi] と発音すると粗野であると見なされた。
9. **e** : 短母音の [e] は [i] と発音され、綴りも *i* となることが頻繁にあった。Shakespeare は *been* を *bin* と綴る。18世紀末でも Benjamin Franklin は *get* / *yet* / *steady* / *chest* / *kettle* / *instead* は [i] とすべきだと主張 (Mencken, H. L., *The American Language*, p. 431)。
10. **r** : 発話は全体に現在よりも口を大きく開けて発音され、特に *r* は強調された。*eg. never* は [nev-arr] のように発音された (Vallins, G. H., *Spelling*, pp. 79-85)。
11. **elision** : 語中母音、語中子音の脱落現象。

- eg. nimbly [nimly] / salt [saut] / somewhat [summat]
12. Richard Hodges, *Special Help to Orthographie or the True-writing of English* (1643) が列挙する“発音が似ていて間違えられやすい単語”：eg. ream と realm、shoot と suit、room と Rome、were と wear、poles と Paul’s、flea と flay、eat と ate、copies と coppice、person と parson、Easter と Hester、pierce と parse、least と lest など。
  13. **er / ear** : [ɑ:r] と発音されることが多かった。convert は convart、heard は hard、serve は sarve と聞こえた。merchant は marchant と発音され、この綴りも通用した。Br.E では clerk / derby など現在でもこの発音様式を残した単語があるが、Am.E では heart / hearth / sergeant など少数の例外を除いて、この様式は廃れてしまった。綴りを発音に合わせて修正した例もある。eg. sherds > shards / Hertford > Hartford.
  14. **ea** : [ei] と発音された。eg. tea / meal / deal. (現在でも、great / break / steak はその発音を保持)。従って、meal と mail は同音異義語。Shakespeare は please と韻を踏む語として grace / knees いずれも選ぶことができた。

もっとも、現在の Americanism の影響は過小評価できず、インターネット上に飛び交う Netspeak の影響力も相乗作用を喚起して、英語の“分裂”どころか“収斂”の様相を呈示している。大英帝国から独立した旧植民地国家アメリカ合衆国の言語に危機感を覚えた Noah Webster は国威発揚を意図してアメリカ英語の辞書を編纂し、「イギリスの英語とは異なる北アメリカ語の誕生」を予見した。John Adams は18世紀末に「英語は来世紀もその後もずっと世界で最も一般的な言語になる運命にある——それは過去においてラテン語が、また現在フランス語がそうであるのと同様である」と表現した。のちに、アメリカの言語学者 Henry L. Mencken は *The American Language* (1919) の中で「イギリス英語とアメリカ英語は異なる道を辿る別々の言語であり、アメリカ英語は将来イギリス英語から独立した一言語になるであろう」と記述し、英米語の分化と米語の独自性を示唆したが、改訂第4版においては「アメリカ英語のイギリス英語への影響は顕著であるので、イギリス英語がアメリカ英語の一方言と化すこ

とだろう」と修正した。それより以前に、H. Sweet は「一世紀も経てば、英国と米国と豪州は相互に理解不可能な異なる複数の言語を話すことになる——その理由は、発音の変化がそれぞれに異なっていることに起因する」(1877)と指摘し、さらに遡れば、前掲の N. Webster もまた同様の点を強調して、「ドイツ語或いは相互から、オランダ語、デンマーク語、スウェーデン語が誕生した経緯に似た“必然的で不可避の発達”である」(1789)と説述している [Crystal 1997: 134]。いずれの場合であっても、彼らの予測とは裏腹に、多少の語彙使用の相違や綴り字の相違があつたとしても、当該言語使用によって相互理解が不能に陥るような事態には至らなかつた厳然たる現実が存することを確認しておかねばならない。

さて、視点を再び英国に転じると、「綴り字の表音性を高めようとする英語の綴り字改革運動は大母音推移などによる綴り字の非表音化が目立ち始めた16世紀に始まる」[大塚高信・中島文雄(編)『新英語学辞典』研究社, 1982: 1146-7] というのは正鵠を射た表現で、16-17世紀の正音学者の改革運動と<sup>1)</sup>、18世紀の Samuel Johnson (1700-1799) の『英語辞典』編纂の意図とその影響に spelling reform の枢要を得ることができる<sup>2)</sup>。

山口 (2009: 18) に拠れば、英語正書法の改良を目指した綴り字改革運動を十分に捕捉するには、『英語学史』(1975) の記述内容に加えて、1834年から1975年までの140年間に関心を払うことが必要であるという。その根拠は、氏が設定した起点となる1834年には Robert Latham が比較言語学者 Rasmus Rask の影響を受けて綴り字改革小冊子 *An Address to the Authors of England and America on the Necessity and Practicability of Permanently Remodelling their Alphabet and Orthography* を著わし、終点となる1974年には英語教育に関するイギリス政府の諮問委員会報告書 *Block Report* が発表され、その間の140年に綴り字改革運動が高揚する時期が5期ばかり認められる事実求められる(1870-1880s, c.1910, 1920s, c.1950, 1960s)。

確かに前掲の『英語の改良を夢みたイギリス人たち』(山口2009) は英語の綴り字改革運動に関して網羅的記述を試みた労作であり、Isaac Pitman が19世紀の当該問題に与えた影響も看過できない事実ではあろうが<sup>3)</sup>、本稿では、3つの言語学的視点から当該問題をとらえたい。19世紀については、第Ⅲ節において言及するように、Henry Sweet (1845-1912) の著わした *A Handbook of Phonetics* (『音声学提要』1877) に提示され

た音声表記法を基礎にした綴り字改革を重要視する。また、20世紀については、第IV節で見ると、OED 編纂の時代にあつて、Frederick J. Furnivall (1825-1910) が中心的役割を果たした英国 Philological Society の綴り字改革論に対して、初代編集主幹 James Murray (1837-1915) が示した姿勢を特記する。さらに、21世紀の現時点については、第V節で指摘するように、現在の英語の置かれた立場から不可避ともいべき国際英語論の観点から、“International Standard Spoken English” を標榜する David Crystal (1941-) の英語綴り字改革に対する現実的な見解へとつながる大きな潮流を認めることが適当であると考えられる。

### III. 音声学と綴り字改革—— H. Sweet ——

1880年5月21日の英国言語学会 (Philological Society) の年次総会で、当時会長職にあつた J. Murray が学会の権威の下に綴り字改革案を作成することの必要性を説いたが、それに呼応して、1876-78年に同学会の会長を務めた H. Sweet が2つの文献を著わして、その後学会がまとめる「英語綴り字の部分的修正案」(1881)の基礎を固めた。第一文献は *History of English Sounds* (『英語音声の歴史』1874) であり、これは英国言語学会誌に掲載された論文をまとめたもので、古英語期からの英語の音韻変化を論じたものである。第二文献は *A Handbook of Phonetics* (『音声学提要』1877) であり、その附録部分にある *The Principles of Spelling Reform* (綴り字改革の原理) に表音主義によるローミック (Romic) が手際よくまとめられている。「英語綴り字の部分的修正案」が参考とした他の文献には、George Withers, *The English Language Spelled as Pronounced* (1874)、Max Müller, *On Spelling, Fortnightly Review* 19 (1876)、John Hall Gladstone, *Spelling Reform from an Educational Point of View* (1879<sup>2</sup>) 等がある。もっとも、「英語綴り字の部分的修正案」は同学会内において、グロシック (Glossic) の考案者 Alexander John Ellis によって痛烈な批判を受けながらも公にされるのだが、このことは「当時のイギリスの綴り字改革運動が置かれていた混迷状態を象徴的に表わしている」[山口2009: 94] といえよう。

ここで、音声学の性質と綴り字問題との関係を整理してみると、研究対象を“音声言語”におく音声学 (Phonetics) にとっては“書記言語”の

問題である綴り字改革論は基本的に考察対象外であるというのが一般的認識であろう。実際、現在の英国音声学の第一人者 John Wells は *Orthographic Diacritics and Multilingual Computing, Language Problems and Language Planning* 24 (2001) の中で、「言語学者の視点から見れば、綴り字というのは言語において特に重要な側面ではないのだ。言語学的な意味においては、言語の一部であるとさえも言えないくらいなのである」[山口2009: 206] と指摘する。「しかし専門家以外の一般の人々にとっては、綴り字は極めて可視的であるがゆえに注目の的となる」[*ibid.*] と続けて述べていることから、音声学者が綴り字問題に無関心でよいということとは同義ではないようだ。この側面から考えると、表音式綴り字は、トランスクリプション(音声表記)体系を具現化した一方策であるといえ、音声学との接点はそこに見出だすことができる。すなわち、19世紀英国における Sweet 流音声学はそれを体現したものに他ならない。

Sweet の基本的関心事は、言語音をいかに正確に表記するかであったことに間違いはなく、それは言語音の分析に比べて決して軽視されるものではなかった——“The notation of sounds is scarcely less important than their analysis: without a clear and consistent system of notation it is impossible to discuss phonetic questions intelligibly or to describe the phonetic structure of a language” [Sweet 1877: §.297]。そして、英語の alphabet がそれに適していないことは明らかであった——“The only perfect alphabet would evidently be one in which every symbol bore a definite relation to the sound it represented. In the Roman alphabet these relations are entirely arbitrary, and ...” [*ibid.*: §.298]。さらに、Roman Alphabet の欠点を補う次の4つの方法が提示される——①新しい文字型を鑄造すること、②強弱アクセント記号といった弁別的発音符を採用すること、③ th や kh のような二重綴り字を採用すること、④反転文字・斜体・大文字を採用すること—— [*ibid.*: §.300]。Sweet の『音声学提要』(1877) では、音声表記システムとして、精密ローミック(Narrow Romic)と簡易ローミック(Broad Romic)が提案されているが<sup>4)</sup>、『音声学提要』の附録部分「綴り字改革の原理」で採用されるのは簡易ローミックである。次に実例を示す。

[ローマン・アルファベット表記]

— I saw him just for a moment at the door.

[精密ローミック表記]

— ehɪh sɔɪe<sup>1</sup>m dzhɪhstfʌɾʌ moɪo<sup>1</sup>mɪhntʌtdhə dɔɪɪʌ\

[簡易ローミック表記]

— ai saøem jestfərə moumentətdhə daøə\

しかし、残念なことに、音声表記とそれに伴う綴り字改革にこれほど熱心であった Sweet も *Spelling Reform and the Practical Study of Languages* (1885) では、綴り字改革に対する最終かつ唯一の解決方法として、「表音式綴り字」ではなく「速記」を採り入れることを提案し、「自らの強い関心が綴り字改革運動からは離れ始めていることを隠さなかった」[山口2009: 197] ことは、当該問題の複雑さと時代の潮流をよく表わしている。たとえ、簡易ローミックといえども素人向けには複雑であり、音声表記が一般化できるはずもなかったのであるから、これが音声学者としての視点の限界であるとも指摘できる。

Sweet の最終案がどういった形に落ち着いたかを知るために、「英語綴り字の部分的修正案」に依拠した Sweet の論文の一節を紹介するが [山口2009: 196]、抵抗感の少ない Pitman 考案の簡易式綴り字が使用されていることが分かる——“It is remarkabl that the rize of modern scientific filology, and its rapid development during the prezent century, hav had but litl influence on the practical study of language; and it is a question whether the influence it has exercized has not been, on the hole, rather injurious than beneficial...” (下線は本稿執筆者による)。

#### IV. 辞書編纂と綴り字改革—— J. Murray ——

英国言語学会 (Philological Society) の Richard Trench (1807-1886) による *On some Deficiencies in our English Dictionaries* (1857) に端を発する一大プロジェクトは、欧州大陸のグリム兄弟による『ドイツ語辞典』に匹敵するような歴史的原理に基づく大辞典を英国においても編纂することであった。そして、約70年の歳月を費やして完成したプロジェクトの成果である英語辞典は、年配者には旧称 NED (1928) として知られるそ

の第一分冊が Volume I (A-Ant) として上梓されたのは1884年であり、その後全分冊をまとめた完成版が *The Oxford English Dictionary on Historical Principles* (OED) 第一版 (10巻本, 1933) となった。当初 F. Furnivall がその編集の労を執り、歴史的文献資料を提供するために Early English Text Society (1864) の設立等に尽力したが、その後の実質的編集主幹は歴代4名で、在任期間は、それぞれ James Murray (1879-1915)、Henry Bradley (1901-1925)、William Craigie (1901-1928)、Charles Onions (1914-1928) である。その後、『新補遺』4巻本を Robert Burchfield (1972-1986) が編集し、それを組み入れて、新たに5,000語を追加した第二版 (20巻本, 1989) に至っている。2010年には全面的改訂版 OED 第三版の出版が予定されている。

英国言語学会が「英語綴り字の部分的修正案」を策定した同時期において、「一部の綴り字改革論者たちが OED に対して強く望んだのは、この辞書の発音表記方式を綴り字改革実現への大きな足がかりにしたい」[山口2009: 200] という野望を抱いたからだとしてもそれほど驚くことではない。Samuel Johnson の『英語辞典』(1755) 以来、実質的な英語アカデミーとしての機能を定評のある辞書が担ってきた事実が英国には存在するからである。しかしながら、Johnson の『英語辞典』には発音表記はなく、アクセント記号を附しただけのものであった。それは Johnson が音声を軽視していたからではなく、「当時の発音にはあまりに多くの違いがあり過ぎてうまくまとめられなかった」からである [小島1999: 190]。そこで、Johnson の『英語辞典』が綴り字や語義について一定の基準(規範)を示したように、発音についても何らかの基準を提示する規範的役割を担った辞書の刊行が期待された。NED (OED) 第一分冊が上梓されるまでの間に、William Johnston (1764) *A Pronouncing and Spelling Dictionary* / William Kenrick (1773) *A New Dictionary of the English Language* / Thomas Sheridan (1780) *A General Dictionary of the English Language* / Thomas Sheridan (1789) *A Complete Dictionary of the English Language* / John Walker (1791) *A Critical Pronouncing Dictionary, and Expositor of the English Language* 等、発音表記に重点を置いた一般辞典が現われたが、いずれも決定版には至らなかったのである。その意味からも、OED に向けられた期待は極めて大きかったといえる。

音声学識 Sweet から OED の発音表記執筆を断われ苦境に陥った編集主幹の Murray ではあったが、改良綴り字を使って発音表記を行なってはどうかとの提案に対してはこれを否定して、「辞書で使う発音表記は、いかなる意味においても綴り字改革を意図してはいない」ことを Isaac Pitman にも言明している [山口2009: 202]。これらの熱心な綴り字改革論者のなかに James Lecky があり、Sweet の考案した Romie 改訂版を薦めたが、結局は Murray は独自で考案した発音表記システムを採用した。参考として、Johnson 『英語辞典』、OED 第一版と OED 第二版の発音表記を対照して次に例示する。

[Johnson's] demo'nstrate  
 [OED<sup>1</sup>] demonstrate [dɪmɔ'nstreɪt]  
 [OED<sup>2</sup>] demonstrate [dɪ'mɒnstreɪt]

もっとも、Murray 考案のこのシステムは OED 以外の辞書では用いられもせず、OED でさえも第二版 (1989) では、国際音声記号を採用することになったことは、英語の音声表記の改良がいかにか合意形成を得ることの難しい課題であるかを示唆している。Murray が英国言語学会で綴り字改革案作成を呼びかけるのは、第 III 節で言及した 1880 年のことであり、この時には自身の編纂する辞書の発音表記にはそれを採用する気がなかった——すなわち、綴り字改革案と一般辞書の発音表記法は別であるという基本姿勢を堅持していたことが分かる。換言すれば、複雑な英語の綴りに対して、音声の側面からの要請よりも、意味の側面からの要請を重視する立場を採ったということであり、また、規範主義的立場ではなく、あくまで記述主義的立場を辞書編纂に求めたということであろう。

皮肉なことに、OED 第二版の simplified という見出し語の例文に Murray の伝記からの引用で “In 1905 ... he [sc. James Murray] joined the American Simplified Spelling Board” が収載されている。そこから判断する限り、みずからの辞書記述に反映することはなかったが、Murray が綴り字改革を是認していたことは確かなことであるといわねばならない<sup>5)</sup>。

## V. 国際英語観と綴り字改革—— D. Crystal ——

*English Today* 55 [14-3] (1999: 12-19) に David Crystal が掲載した “Isaac Pitman: the linguistic legacy” という論考は19世紀の綴り字改革運動を今日的視点から再評価するものである。この論文によると、OED の編纂に心血を注いだ前掲の Murray による綴り字改革運動が成功しなかった理由が3つ指摘されている——それは、①綴り字改革を促進する公的機関がなかったこと、②改革運動の関係者間の利害が対立していたこと、③綴り字改革案が一本化できなかったことに起因するものである[山口2009: 227]。さらに Crystal は、EGL/EIL という観点から、現在においても将来においても英語の綴り字改革は不要であり不可能である根拠を2点掲げている。第1には、英語は不規則な綴り字をもつという欠点があるにもかかわらず、事実上の *lingua franca* (国際共通語) になっているので、今さら綴り字を変える必要性がないということ、第2として、英語が国際語になり、地球上の諸地域に版図を拡張しているので、植民地政策を推し進めた旧宗主国主導による中央集権的綴り字改革は事実上不可能であろうという観測である [*ibid.*: 228]。そもそも、今日英語が世界語として選択された理由に、英語という言語それ自体に本質的な優位性 (内在的優位性) があるわけではないことは本稿序節で指摘したとおりである。

一方、Crystal のこの論考に対して、Christopher Upward は同じく *English Today* 57 [15-1] (1999: 31-34) に “In Defence of Spelling Reform” と題する反論を展開する。Crystal が指摘する第1の点である英語綴り字改革不要の根拠については、「英語が国際的な共通語になったからといって、不規則な綴り字が英語習得の障害にならないわけではない」と述べ、また、第2の点である英語綴り字改革不可能の根拠については、「綴り字改革に積極的な利点があれば、たとえそれが旧宗主国から提案されたとしても、植民地主義の名残の押しつけだとは受け止められないであろうし、加えて、ドイツ語、フランス語、スペイン語の例のように、国際的な協力体制を整えて綴り字改革を試みることも可能だ」と述べる。Upward の主張の基盤をなす考え方——すなわち、EGL/EIL の地位を強固なものにするには、英語の欠陥ともいべき不規則な綴り字を改良する必要がある——は氏の信念であろうし、同様の見解は他に窺い知ることもできるが [Bailey 1991: 179-213]、それだけで他を説得するにはいささか naïve な

議論であるといわざるを得ない。なぜなら、その見解は、英語という言語が国際共通語となるには、その地位を占めるようになるだけの内在する言語的優越性があるという立場を強調することになるからである。

世界の言語情勢を俯瞰する際に、社会言語学的視点に拠ることが方法の一つとして定着した現在にあっても、母語話者からみた英語優越性を主張する言説は後を絶たない。Svartvik & Leech (2006: 9) も Bragg (2004: 138) の記述に対して批判的に言及し、「英語が少なくとも現時点における覇者となったのは、その話者が歴史における重要なポイントで、政治的、経済的、軍事的な成功を取めたためであって、言語自体の特徴のためではない」と改めて強調している [山口2009: 230]。

総じていえば、識字率を上げるための英語の学習において、それを助長するような綴り字改革の必要性に應えるという19世紀の綴り字改革論の主目的は20世紀の綴り字改革論に受け継がれているとよいが、20世紀から21世紀の場合には、「国際語としての英語」のリテラシー教育に寄与するものでなければならないという視点が不可欠なのである。

最後に、Crystal (2004: 64-91) の指摘する現代英語正書法事情に注意を払っておくことは、英語の綴り字改革の将来を展望するうえで有意義であろう。20世紀後半からのインターネットの普及による e-mail の繁用が英語の正書法に、話し言葉のようでもなければ (not-like-speech) 書き言葉でもない (not-like-writing) 言語媒体としての Netspeak の出現を可能ならしめたことは特筆に値する。新しいコミュニケーション媒体の出現により、それを利用する言語内部に言語形式の変化が生じていることを窺うことができる。例えば、rebus techniques (b4 = before / CUl8er = see you later)、initialisms (afaik = as far as I know / imho = in my humble opinion)、respelling (thx = thanks) が使われる<sup>6)</sup>。これに加えて、書記体系に変化が生じていることも看過できない事実である。例えば、capitalization 規則の不遵守、punctuation の縮小化・欠落、spelling におけるアメリカ式綴りの浸透、spelling errors に対する寛容性 (教養度の問題ではなく、単なるタイプミスとして見なされる) などは、むしろ on-line 言語の表現幅を拡張していると解釈でき、新しい慣習法の導入として理解される。活版印刷術が導入された時には句読法や綴り字の固定化が行なわれ、電話が導入された時には新しい談話の応答が考案され、放送媒体が導入された時には話し言葉の文体が多様化したことを思い起こせば、新

しいテクノロジーに新しい言語的慣習は不可避であると考えている点に、Crystalの柔軟な思考とバランス感覚が看取できる。また、インターネット新語形成(造語法)として compound〔合成語〕(click-and-buy / one-click / double-click; cyberspace / cyberculture; hypertext / hyperlink)(ただし、cyber- と hyper- は接頭辞と考えれば derivation〔派生語〕という別分類になるかもしれないが)、blend〔混成語〕(netiquette / infonet / datagram)、acronym〔頭文字語〕(BCC / DNS / FAQ / HTML / URL<sup>7)</sup>)の3種類を認めることができる。かつて Crystal(1988: 7)はインターネット上で使用される英語が80%にも達すると指摘していたが、その後、他の研究機関により2002年末までには50%以下になると予測され、現実になんてなっている。実際、日本の場合は Web 上の使用言語は90%が日本語である。今後、インターネット環境問題——つまり、インフラの整備や英語以外の言語で使われる特殊文字やアクセント表示の問題等——が解決されれば、インターネット上の多言語化はますます進むであろう。そして、それに伴う新しい綴り字改革が生起する可能性も皆無とはいえない。

## VI. 結 語

本稿では、しばしばカオス状態にあると揶揄される“英語の綴り字と発音の乖離”について、それを改善できるかどうかの将来性を19世紀、20世紀、今世紀を代表する言語学者の見解を基礎に考察してみた。H. Sweetの場合には、言語音の研究という立場から、それをできるだけ忠実に転記するシステムを考案したが、一般化するには複雑で無理があった。J. Murrayの場合には、英語の一般辞書における発音表記という問題について、それを綴り字改革とは切り離して考えるという姿勢を示した。英語の綴り字に対して、音声面からの要請よりも、意味面からの要請を重視した結果だといえよう。少なくとも Murray は規範主義者ではなく、おそらく辞書編纂者はおしなべて記述主義を採るのであろう。D. Crystalの場合には、21世紀に英語が置かれた世界的立場とインターネット技術の進歩に鑑みて、極めて現実的に、旧宗主国主導による英語の綴り字改革は不要かつ不可能であることを指摘した。その包含する“綴り字と発音の乖離”という言語的不利益を凌いで余りある英語に対する必要性が現代世界には

存在する。英語にアクセスする労苦を犠牲にしても、そのことによって得られる有利性は大きい。

最後に、本稿の究極の目標であった、今後の英語の綴り字改革について、その予見を試みたい。英語には「遠心力」も「求心力」も働くのである。地域それぞれの置かれている状況と *identity* の必要性を反映すれば「多様化」を強化することになり、他方、相互理解度を求めれば「標準化」を強化することになる。国内においても国外においても相互理解度の必要性は高く、今までも *lingua franca* は求められてきたのである。それに応じて、Br. E と Am. E の差異は小さくなり、国際的に標準化された話し言葉の出現可能性が大きくなっている。言語を通して、みずからの *identity* を表現すると同時に、言語を通して *communication* する能力を得たいとする思い、すなわち、「遠心力」と「求心力」とが同時に必要とされる時代に我々は生存している [Crystal 2004: 38]。すなわち、話し言葉の差異すら縮めようとする傾向が看取されるということである。D. Crystal は *International Standard Spoken English* を標榜し、Jennifer Jenkins (2000) は *English as a Lingua Franca (ELF)* という形で21世紀の英語を位置づけたうえで、*Lingua Franca Core* となる音韻習得を提唱する。このように、話し言葉を中心にした動きが活性化すれば、その話し言葉モデルに必要とされる書き言葉（綴り字）のイメージにも何らかの修正が必要となるかもしれない。ただし、その場合の修正には、Br. E/Am. E を標準モデルとするものとは限らない可能性があるということは附言しておきたいが、その際に、現在14億とも15億人とも推定される *non-native speaker* の数の論理だけで Br. E/Am. E を排除する権利を認めることはできないであろう。現在の英語は国際共通語といえども自然言語であり、 에스ぺ란โตのような人工言語ではなく、ゲルマン3部族（アングル族、サクソン族、ジュート族）のブリテン島への入植以来1,500年を超える歴史と言語的遺産を有しており、綴り字の改革が同音異義語や派生語彙の混乱を招いたり、語源にアクセスすることが不可能となる語義習得の困難を惹起する等、書記体系全体に大きな影響の及ぶ変革であることを考慮の内に置かならば、それほど容易に合意形成の成り立つ問題ではないことは、これまでの綴り字改革の歴史が雄弁に語っている。

註

- 1) 16世紀から17世紀には、T. Smith, *De Recta et Emendata Linguae Anglicae Scriptione Dialogus* (1568)、J. Hart, *An Orthographie* (1569)、W. Bullokar, *Book at Large* (1581)、A. Gill, *Logonomia Anglica* (1619) [これについては後代の音韻学者 E. J. Dobson が高く評価]、R. Mulcaster, *The First Part of the Elementarie* (1582)、W. Coote, *English Schoole-Master* (1596)、J. Wallis, *Grammatica Linguae Anglicanae* (1653)、J. Wilkins, *Essays towards a Real Character and a Philosophical Language* (1668) 等の綴り字改革の潮流が勢いをみせた。
- 2) 一般に規範主義者の権化と見なされる Samuel Johnson だが、『英語辞典』(1755) 編纂に先立つ『企画書』(*The Plan of a Dictionary of the English Language*, 1747) においては二律背反の態度を呈している。「本辞典の主たる目的は、英語の慣用表現の意味を純化し確定化することにある」(第7段)と明記しながらも、「永遠と安定を産出することのできない人の所産である言語は絶え間なく変化する存在である」(第36段) ことを十分に認識している。事実、7年の歳月を費やして出版した『英語辞典』の「序文」(Preface) では、「この辞書の編纂に賛意を示してくれた人々は英語を固定化し、放置されてきた変化に終止符が打たれるのではと期待していたと思うが、そして自分自身も最初はそうできるのではないかと思っていたのだが、今や理性と経験に基づいて不可能ではないかと思いはじめている」と告白する。さらには、「自分の辞典が防腐処理を施し、墮落や腐敗から自国語を護ることができるような辞書編纂者は他人から嘲笑されても仕方がない」という自虐的な言葉が表出される側面から判断すると、むしろ記述主義者としての Dr. Johnson 像も同時に浮かんでくることに留意されたい。
- 3) 19世紀の綴り字改革は、I. Pitman, *The Phonotypic Journal* (1843) に端を発し、A. J. Ellis, *On Early English Pronunciation*, vol. 3 (1871) はそれを改良した Glossic を考案し、H. Sweet, *A Handbook of Phonetics* (1877) は Romic を考案した。さらに、E. Jones, *Popular Education* (1875) は Analogical Spelling を発表したが、それらのいずれも広く世間に受け入れられることはなかった。しかし、これらの潮流が American Spelling Reform Association (1876) と British Spelling Reform Association (1879) の設立に反映したと見なされる。
- 4) Romic の命名は、英語の文字である Roman Alphabet の音価を基礎にしていることに由来する [Sweet 1877: §. 303]。
- 5) 20世紀の綴り字改革において特筆すべきことは、1906年から米国において Simplified Spelling Board が、英国においても Simplified Spelling

Society が相次いで設立され、綴り字改革運動を開始したことである。本文で言及した J. Murray の他に、W. Skeat、H. Bradley、J. Wright もその活動に熱心であった。同学会は R. E. Zachrisson の考案した Anglic を改良した New Spelling を発表した (1941)、一般には受け入れられなかった。特に、辞書編纂家として著名な H. Bradley や W. Craigie は綴り字の表音性に懐疑的で、綴り字は表意的であるべきだと主張した。後代の Chomsky & Halle (1968: 49) も「現代の英語正書法が最適なものに著しく近似である」として、伝統的な綴り字を擁護する立場を崩さない。

- 6) 本筆者の手元には2001年に英国で購入した e-mail 用の text-messaging dictionary & guide がある。WAN 2 TLK?: *ltle bk of txt msgs* (Michael O'Mara Books Ltd., ISBN: 1-85479-678-X) と LUVTLK! E>: *ltle bk of luv txt* (Michael O'Mara Books Ltd., ISBN: 1-85479-890-1) の2冊であり、有益な情報を提供してくれる。本文に引用した略語の他にも、FYI = for your information / HAND = have a nice day / IMO = in my opinion / KIT = keep in touch / MYOB = mind your own business / OTOH = on the other hand / TTUL = talk to you later / WAN2TLK? = want to talk? などよく見かけるものが採録されている。

また、Crystal 著 *Language and the Internet* (2001) pp. 85-86 には Table 3.2: some abbreviations used in Netspeak conversations として afaik = as far as I know から 4yeo = for your eyes only まで 112 語の略語が提示されている。

- 7) インターネット上でよく見かける HTML は “hypertext markup language”、URL は “uniform resource locator” の頭文字語のこと。

### 参考文献

- Bailey, Richard W. (1991) *Images of English: A Cultural History of the Language*. Cambridge: Cambridge U. P.
- Baugh, Albert and Thomas Cable. (2002) *A History of the English Language*, 5th ed. London: Routledge. [永嶋大典 他(訳) (1981) 『英語史〈第3版〉』東京: 研究社.]
- Bragg, Melvyn. (2003) *The Adventure of English: The Biography of a Language*. London: Hodder & Stoughton.
- Bryson, Bill. (1996) *Made in America: An Informal History of the English Language in the United States*. New York: Avon Books.
- Chomsky, Noam and Morris Halle. (1968) *The Sound Pattern of English*. New York: Harper & Row.

- Collins, Beverley and Inger M. Mees. (1998) *The Real Professor Higgins: The Life and Career of Daniel Jones*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Crystal, David. (1988) *The English Language*. London: Penguin Books.
- Crystal, David. (1997/2003<sup>2</sup>) *English as a Global Language*. Cambridge: Cambridge U. P.
- Crystal, David. (1998) Isaac Pitman: the linguistic legacy, *English Today* 55 [Vol. 14, No. 3], 12-19.
- Crystal, David. (2004) *The Language Revolution*. Cambridge: Polity Press.
- International Phonetic Association. (ed.) (1999) *Handbook of the International Phonetic Association*. Cambridge: Cambridge U. P. [竹林滋・神山孝夫(訳)(2003)『国際音声記号ガイドブック』東京:大修館書店.]
- Jenkins, Jennifer. (2000) *The Phonology of English as an International Language*. Oxford: Oxford U. P.
- 小島義郎 (1999) 『英語辞書の変遷』東京:研究社.
- 児馬 修 (1996) 『ファンダメンタル英語史』東京:ひつじ書房.
- 久保内端郎(編註)(1993) 『英語史入門』東京:金星堂.
- McArthur, Tom (1998) *The English Languages*. Cambridge: Cambridge U. P.
- Muggleston, Lynda. (ed.) (2000) *Lexicography and the OED*. Oxford: Oxford U. P.
- 中尾俊夫・寺島廸子 (1988) 『図説 英語史入門』東京:大修館書店.
- 中尾俊夫 (1989) 『英語の歴史』東京:講談社.
- 大森裕實 (2008) 「フィロロジスト Dr ジョンソンの言語観」『愛知県立大学外国語学部紀要〈言語・文学編〉』第40号, 1-22.
- Quirk, Randolph (1974) *The Linguist and the English Language*. London: Edward Arnold Publishers Ltd.
- Svartvik, Jan and Geoffrey Leech (2006) *English: One Tongue, Many Voices*. Hampshire: Palgrave Macmillan.
- Sweet, Henry. (1877) *A Handbook of Phonetics*. Oxford: Clarendon Press. [Rept. 木原研三(編)(1998)『音声学提要』東京:三省堂.]
- 寺澤 盾 (2008) 『英語の歴史——過去から未来への物語——』東京:中央公論新社.
- Upward, Christopher. (1999) In defence of spelling reform, *English Today* 57 [Vol. 15, No. 1], 31-34.
- 渡部昇一 (1975) 『英語学史(英語学体系13)』東京:大修館書店.
- 渡部昇一 (2001) 『渡部昇一小論集成(上)』東京:大修館書店.
- 山口美知代 (2009) 『英語の改良を夢みたイギリス人たち』東京:開拓社.